森六、開発体制を強化

コンパウンド 環境低負荷に貢献 ケミカル 未利用資源を活用

森六はケミカル事業におけるものづくり事業強化の一環として、コンパウンドおよびケミカルの両分野で開発体制を強化する。コンパウンドラボでは環境負荷の軽減に貢献する素材の開発を、ケミカルラボではカニガラなど未利用資源の活用によるバイオステュミント資材などの開発を進めていく方針だ。

森六はこの4月から第14次中期経営計画を開始した。ケミカル事業については、その戦略の一つとして将来の製品化に向けた開発の推進を掲げており、ものづくり事業拡大による付加価値創造に注力する考えを明らかにしている。

コンパウンドラボは、2023年2月に関東工場（群馬県太田市）内に開設し、同年10月から本格的な活動を開始している。同社がこれまで蓄積してきた技術を活用、自動車部品の製造を行っていき、生産事業本部（旧森六テクノロジ）と連携

し、リサイクルカーボンやセルロース繊維、バイオ由来の素材など、サステナブルで環境に配慮した材料を使用した樹脂ペレットなどの開発を進めていくという。

また、ケミカルラボは24年4月に開設、今年4月には川崎市が運営するナノ医療イノベーションセンター（iCONM）内のシェアラボに移転している。同ラボでは福井県立大学と連携、エビガラやカニガラといった未利用資源をアップサイクルし、バイオステュミントなどの農業資材や機能性化粧品原料として供給することを想定している。

この材料については、現在量産技術の確立に向け準備を進めている段階で、26年にはそのスケールアップを目指し、その後、量産開始によるビジネスへの移行を視野に入れる。農業資材を取り扱っているグループ企業の森六アグリ（徳島市）と連携し、マーケティング活動を進めていく考えだ。